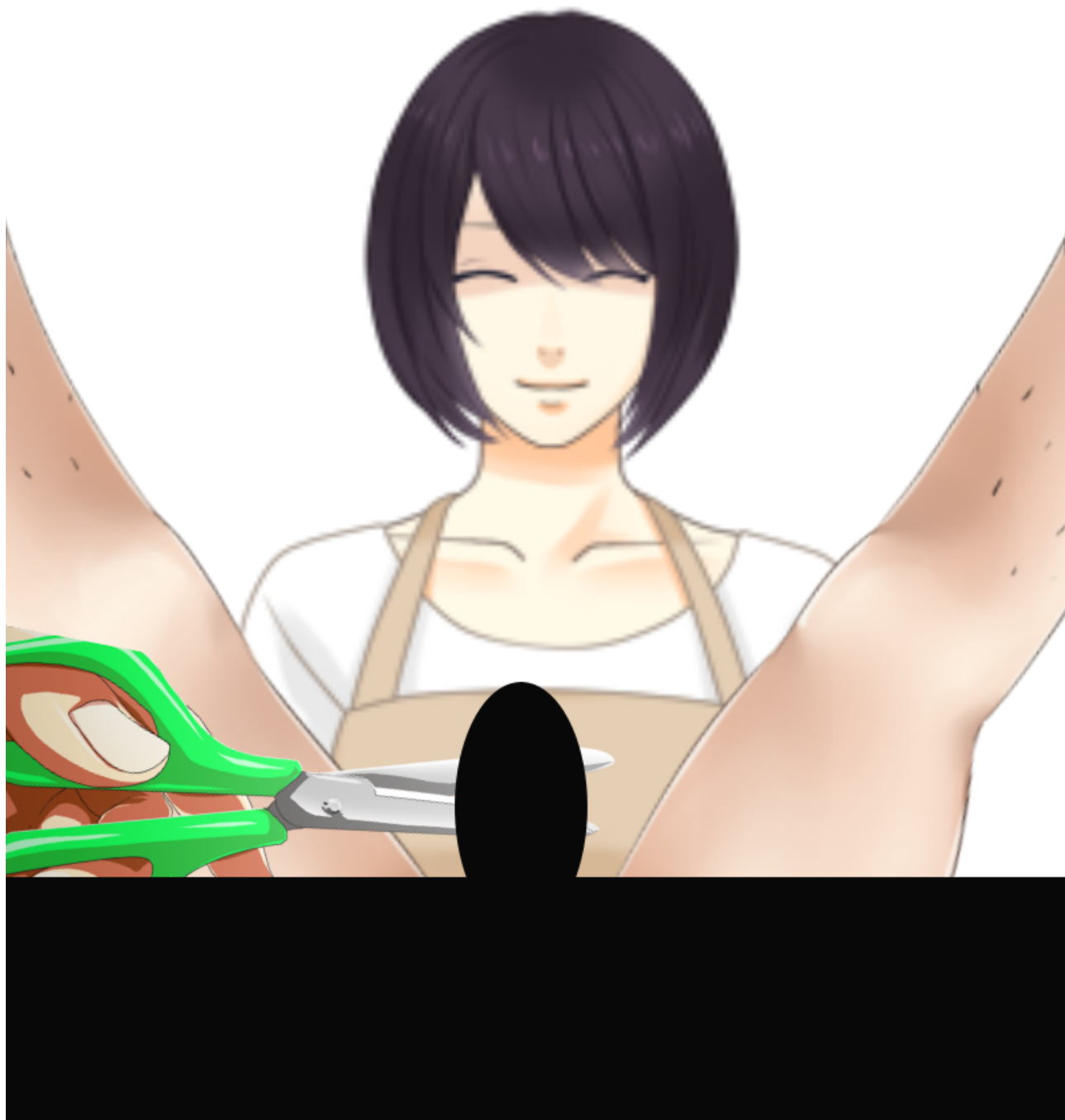


妻がDV夫のアレを ちよん切った理由は占いだった！

男女だから話が纏まらない、
と主張する
イカレ女占い師を信じる妻！



玉子王子 著

1章 女占い師集団と協力し、DV夫を捕まえる妻

野平と表札がかかった建売の一軒家の前で、そこの主が笑う。

「おお、よしよし」

猫に餌を見せる優しくそうな男が、その家の主。

いい大学を出て、いい会社に入り、まだ子供はいないが育児休暇の制度をしっかりと調べ、とる気は満々。

そんな、はたから見ればいい夫だった。

猫が餌に近付く、道に置く男。

それに猫が食いついたところを、腹を蹴飛ばす。

ギャン、と叫び、転がる猫。

手を叩く男。

「バーカ！ 誰が野良猫に餌なんかやるかよお！ 文句言われるじゃねえかよ！」

もちろん、それが理由ではまったくない。

蹴飛ばされた猫が壁にぶつかり、ヨロヨロと立ち上がる。

足を引きずって逃げる。

「お、骨折でもしたか。こいつは治療費もかからないからいいよな」

こいつは。

別の相手なら治療費がかかるということだ。

扉を開ける。

「おい、今帰ったぞ！」



「おい、今帰ったぞ！」
外では、妻には優しい男。
しかし二人きりのときは、まったく人が違う。
「お帰りなさい……あつ」

パン、と頬を平手打ちにする。

「出てくるのが遅えんだよ！ これだから女は……」

舌打ちする。

俯く妻。

見返せば、目付きが気に食わないと言い出しかねない男だ。

結婚以来、ずっとDVを受けていた。

骨折ぐらいよくあること。

というか、結婚以前、

付き合っただけで肉体関係が出来た辺りから徐々に本性を見せ始めた。

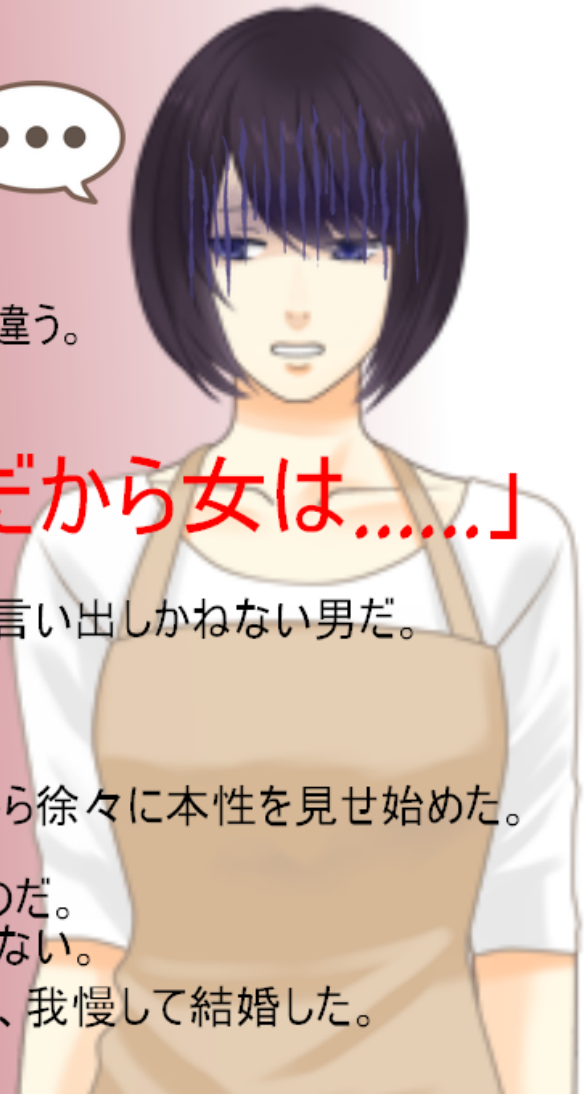
が、もうどうにもならなかった。

怒り出すと手がつけられない人間なのだ。

別れようなどといえどどうなるかわからない。

一様いい会社に入る予定だったので、我慢して結婚した。

ましになるかもしれないと思ったのだ。



外では、妻には優しい男。

しかし二人きりのときは、まったく人が違う。

「お帰りなさい……あつ」

パン、と頬を平手打ちにする。

「出てくるのが遅えんだよ！ これだから女は……」

舌打ちする。

俯く妻。

見返せば、目付きが気に食わないと言い出しかねない男だ。

結婚以来、ずっとDVを受けていた。

骨折ぐらいよくあること。

というか、結婚以前、付き合っただけで肉体関係が出来た辺りから徐々に本性を見せ始めた。

が、もうどうにもならなかった。

怒り出すと手がつけられない人間なのだ。

別れようなどといえどどうなるかわからない。

一様いい会社に入る予定だったので、我慢して結婚した。

ましになるかもしれないと思ったのだ。

今も、期待している。子供が出来れば少しは、と。

期待していた。

しかし、中々出来ないのこの前検査にいき、知らされた。

夫は、子供がかなり出来にくい体質だと。

ずっと二人きりか。

妻、葉子は目の前に僅かに開いていた扉の隙間が閉じた気がした。

というか、自分勝手な夫はこの結果を知らせても、子供が出来ないことを葉子のせいにするのではないか。

悩むが、なんともしようがない。

それが一月前。

そして一週間前、不安を抱えて街を歩いているところで、女占い師に声を掛けられた。

彼女は「悩んでいますね」という、顔を見ればわかる事を言ってまず葉子の心をひきつけた。

そして、「それは男性のことですね」という、相当な確率で当たる適当なことをいい、さらに心を掴む。

というか、何かに縋りたい気持ちだったのだ、葉子は。

DV夫の話を知ると、占い師は仕事の枠を超えてのめり込んだ

仕事として適当に話を聞く気だったが、彼女もDVで苦しんだ経験があったので他人事とは思えなかった。

そして、解決策を示した。

それは驚くべき内容だった。

「お二人の話が通じないのは、やはり男女だからです。男と女の間には深い川があるのです。それを埋める方法は一つ」

チョコキを作ってみせる。

「一旦旦那さんのアソコをちょん切っておペ〇スを切り落とし、女になってもらうのです。おチンチ〇切断します。チン切りですね」

「そ、そんな……でも……」

すでに、心を掴まれていた葉子は、声を潜める。

「男性ホルモンとかは、その……タマタマのほうから……」

「もちろんそちらもブチッと潰します。睾丸も潰しますよ当然。タマタマを残すわけじゃないですか。キ〇タマもぶっ潰します」

真顔で言ってから、女占い師は笑った。

「うふふ、もちろんこんなこと……ナノテクでどっちも治るからできることですけどね？」

「そ、そうですよね。治らないなら絶対出来ませんよ」

「でも、治るんだから許される」

体の半分が吹っ飛んでも生命さえ維持すればナノテクで完全に再生できる世の中だ。

竿や玉ぐらいは、もちろん簡単に治せる。

だが、治せるからいいだろうという彼女たちの発想は常軌を逸していた。

夫からの暴力というのは、やはり男性性による攻撃と思えて、それへの不満がずっと積もっていた、それが一気に出てきたということだろうか。

わけがわからないが、確実にいえることが一つある。

それは見知らぬ占い師と共に、妻が自分の生殖器を切断し、潰しにくるなど想像を絶していて、とても警戒などしようがないということだ。

そして、今日。

平手打ちを食らう葉子の姿を、物陰から女占い師と弟子たちが見ている。

弟子たちも女ばかり四人。

大した理由もなく妻を殴り、女だからダメだなどという野平にいい感情を持つわけがない。

「そういえば、子供のあれ、検査結果どうだった？」

一ヶ月前に出る話だが、今頃聞いてくる野平。

ドキッと、心臓が締め付けられる葉子。

「ふ、普通だって」

「そうか。それじゃとっとと作ってくれよ。うち大会社だからさ、子育て支援とか美味しいんだ。俺らみたいな優秀な人間がどんどん子供産んで支援してもらって……それでこそ優秀な人間が増えていくわけじゃん？ 嫉妬で反対する連中はクズだよな。どうせそういう連中は結婚も出来ないんだ。それはいいことだよな、劣った人間が増えないで済むんだから」

弟子たちは師匠と違い、DVを受けた経験はない。

師匠に心酔してついてきているが、正直「男だから女と話が通じない、だから性器を切断しよう。治るんだから平気平気」という話は意味不明だと思っていた。

しかし先ほどの理不尽な平手打ちに、今のどうしようもない発言とくると、もうこれはちょっと切られた方がいいと言う気がしてきた。

「ねえあなた……今日はちょっと、話したいことがあるの」

「なんだ改まって。お前みたいなのが何考えても、大したことは思いつかないぞ」

「さっき、私のこと叩いたわよね」

「なんだお前！」

バン、と今度は先ほどより勢いよく平手打ち。

床に吹き飛ぶ葉子。

それを足の裏で踏むように蹴りつける。腹。

子供が欲しいといいながら、この振る舞いは無茶苦茶ではないだろうか。

「なんだ！ 殴られるのはお前が悪いからだろ！ それを俺のせいみたいに……盗人、えっ？」

突如、部屋の影から数人の人間が現れるのに気づく。

もちろん即座に気づいたわけではないので、女たち五人はかなり近付いていた。

「お、お前らなんだ！？」

「奥さんに頼まれて、あなたと話し合いに来ました。占い師のエカテリーナ佐藤と申します」

「何だこのババア」

佐藤は五十ぐらいで、年齢より若く見えるぐら이다。

野平は三十五。五十ぐらいの人間をババア扱いは無茶だが、彼の感覚ではそれこそ年下の三十でももう「ババア」だった。ようは「熟女」と呼ばれうる年齢ならもうそうなのだ。

頬を引きつらせる佐藤。

弟子に目をやる。

「ん……ああああっ！」

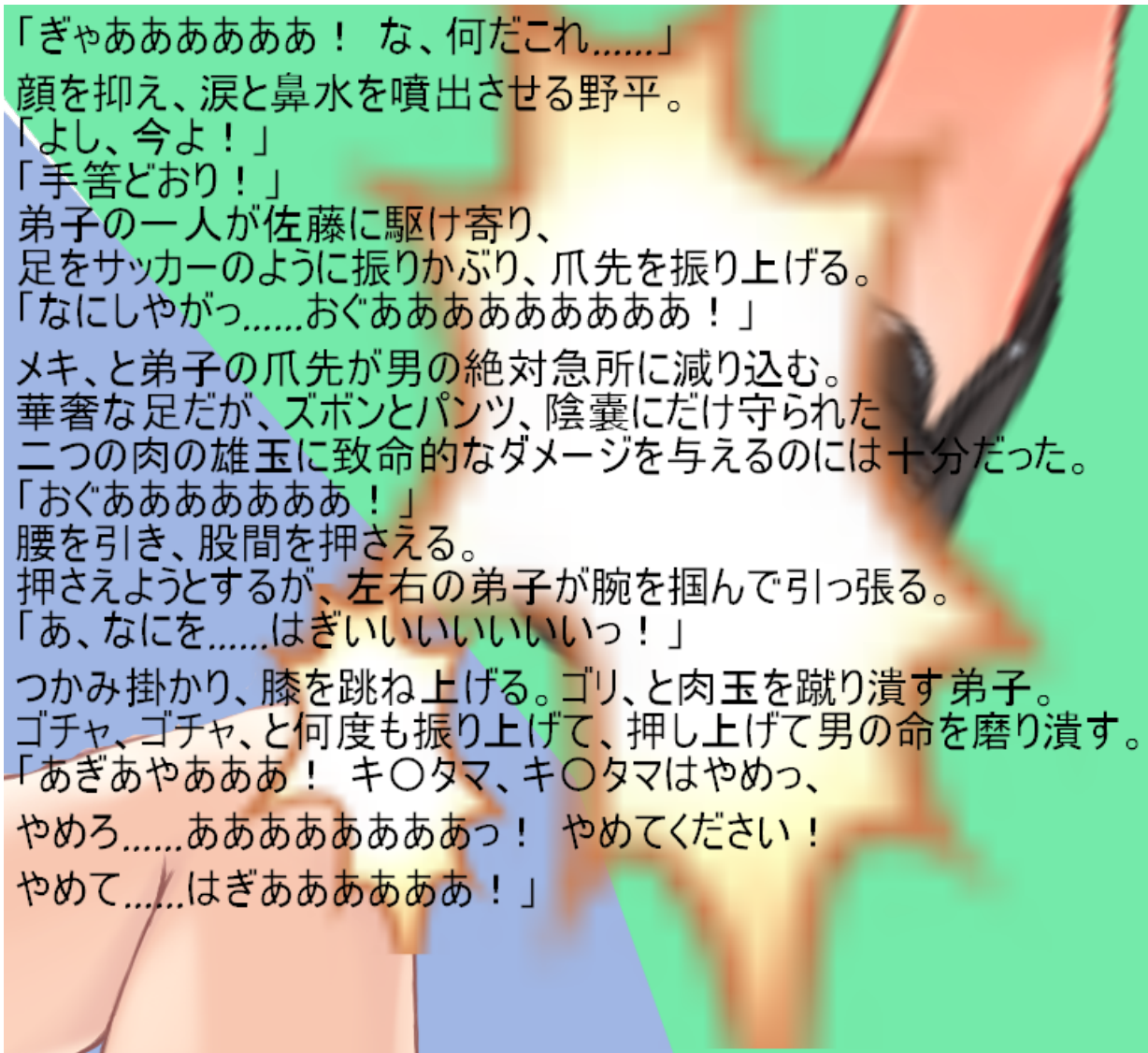
スプレー。

いきなり向けられ、顔に掛けられる。

「ぎゃあああああ！ な、何だこれ……」

顔を抑え、涙と鼻水を噴出させる野平。

「よし、今よ！」



「手筈どおり！」

弟子の一人が佐藤に駆け寄り、足をサッカーのように振りかぶり、爪先を振り上げる。

「なにしやがっ……おぐあああああああああ！」

メキ、と弟子の爪先が男の絶対急所に減り込む。

華奢な足だが、ズボンとパンツ、陰囊にだけ守られた二つの肉の雄玉に致命的なダメージを与えるのには十分だった。

「おぐあああああああ！」

腰を引き、股間を押さえる。

押さえようとするが、左右の弟子が腕を掴んで引っ張る。

「あ、なにを……はぎいいいいいいっ！」

つかみ掛かり、膝を跳ね上げる。ゴリ、と肉玉を蹴り潰す弟子。

ゴチャ、ゴチャ、と何度も振り上げて、押し上げて男の命を磨り潰す。

「あぎあやあああ！ キ〇タマ、キ〇タマはやめっ、やめろ……あああああああっ！ やめてください！ やめて……はぎあああああ！」

のたうつ。

しかし、力はない。始めの何度かの奇襲的急所攻撃が決まり、一気に全身の力を奪われていた。

痛みで体が痺れる。

膝が砕けそうになるが、それは腕を持っていた弟子が肩を抱えるような形で支えて許さない。

横に、佐藤が立って耳をひっぱる。

そして抑えた声で言う。

「ババアで悪かったわねえ。DVやって、見知らぬ女をババア呼ばわり……根っこから女を見下してるらしいわねあんた」

「ち、違う……はぐああああ！ おぐああっ！ はぐっ！」

膝蹴りが止まらない。

腰を引いて、爪先立ち、少しでも肉玉を守ろうとする野平。

その耳をさらに引っ張る。

「このまま睾丸蹴り潰して去勢してあげるから。女に男性器潰される屈辱を楽しんでね」

「ひ、た、助け……」

「睾丸丸丸睾丸、潰れるのよ？ わかる？ 睾丸二個とも潰れるのよ？ 太股の間に、ずっとブラブラし続けてきた大事な相棒、大事な金の玉二つが、今日でおしまいなのよ？ 今日から女の子ってこと。わかる？」

優しく陰囊をもまれつつ言われても、睾丸が惜しい男なら震える台詞。

それが、弟子の足がミシンの針のように絶え間なく股間を蹴り上げ、肉玉を蹴り潰し続ける状態で言われる。

電車通勤だが、駅で便所に行っていなければ悲惨な事になったかもしれない。

いや、現状はすでに悲惨そのものだが。

「あああああ」

「うふふ、ちょっとは奥さんの気持ち、わかった？」

手を挙げる佐藤。

やっと膝蹴りを止める弟子。

肩を支えていた弟子二人も離す。

カーペットの上に崩れる野平。

股間を押さえようとするが、そうする気力もなかった。

その姿を、葉子は黙って見下ろす。

——何よ、いつもあんなに威張り散らしてるくせに……キ〇タマ蹴られたらこれ？ 男なんて玉狙われたらおしまいね……

今の今まで夫が世界のすべてであるかのように怯えていたときの面影は、葉子にはもうなかった。

その目が、腰の高さまでの本棚の上に行く。

そこには、結婚前から彼女が使っていたハサミが置かれていた。

佐藤はそれらを見つつ、満足げに笑う。

と、野平のほうに目をやってさらに笑う。

「あらああ！ 見て、旦那さん、泣いてるわよ！」

「先生、嘘はいけませんよ！ 立派な大人の男性が、私の蹴りぐらいで泣いちゃうわけじゃないですか！ いくら男がキ○タマ狙われたら弱いからって！」

「あら、そうね！ 男性様が、まさか女ごときの蹴りで……うふふ、泣くわけないわよね？ 大事なキ○タマに当たったとしてもね！」

しゃくり上げる野平を見下ろしつつ、歯を見せる。

そして、しゃがんで耳元に口を近づける。

「泣いてもまだまだおわらねーぞ。あんたが心から改心するまで……」

うつぶせの野平の腰の下に手を入れ、股間に触れる。

「男に生まれたこと、後悔させてやるからね？」

「きゃはははは！ 怖い怖い！」

「チンチ○縮んだ？」

「キ○タマ大変だよ？ キ○タマ大変だよ？」

「あー女に生まれてよかった。ぶっさいくな急所ぶら下げて「タマタマ蹴らないで」なんていわないで済むもんね！」

女たちの嘲笑の嵐の中で、震えているしかない野平。

体験版終わり

この後近所の女たちに下半身を丸出しにされて短小を嘲笑されるCFNM

ハサミでちょん切り去勢

そして止めの更なる玉潰し去勢がDV男を待っています

続きは製品版でお楽しみください